2025年８月８日　第162回運輸政策コロキウム

「地域活性化に向けた観光資源としてのローカル鉄道駅活用」

宿利会長　開会挨拶

皆様、こんにちは。運輸総合研究所会長の宿利です。

本日は、ご多用の中、こちらの会場にお運び頂き、また、オンラインでも大変多くの皆様にご参加いただいており、誠にありがとうございます。

運輸政策コロキウムは、30年前の1995年に第1回を開催して以来、当研究所の研究員による研究調査の成果を報告発表し、外部の有識者からコメントをいただいて議論を深めるとともに、新たな情報や知見を皆様と共有する目的で随時開催してきております。前回のコロキウムから少し間が空きましたが、本日は第162回になります。また、次回163回は９月11日に、ワシントン国際問題研究所の福原主任研究員・次長から、ワシントン・レポート「アメリカ航空産業の現状と今後の展望」と題してご報告する予定です。

さて、本日の運輸政策コロキウムでは、「地域活性化に向けた観光資源としてのローカル鉄道駅活用」というテーマについて、皆様とご一緒に考えてみたいと思います。

私自身、実は、ローカル鉄道について廃止するかどうかという議論が出る度に誠に残念な気がしており、153 年前から日本の国民が営々として築いてきたインフラを地域の貴重な資源として最大限生かしていく知恵がどうして出ないのか、と常々思っております。そういうことを考える上での一助にもなるのではないかと、今回の研究成果に関心を持っています。

本日報告する当研究所の武藤雅威主任研究員は、専門が交通計画で、鉄道総合技術研究所企画室戦略調査課長を経て、2019 年から当研究所に主任研究員として所属し、活躍されています。特にいわゆる「TOD」、Transport Oriented Development を含む「鉄道整備と沿線開発」の共同研究調査に長く従事し、その成果については、最近でもベトナム、インド及び台湾とのそれぞれ Webinar で発表されていますし、これらの地域はいずれも「鉄道整備と沿線開発」に極めて高い関心を持っていますので、武藤主任研究員の研究成果は大変高く評価されています。

さて、当研究所が 2023 年に公表した「2050 年の日本を支える公共交通のあり方に関する提言」は、日本の交通分野の多くの有識者に参加していただいて検討した成果です。この中では、今後の公共交通のあり方を 9 つの柱に整理し、その一つとして、「観光を支える交通サービスの展開」が掲げられています。本日の報告も、この中での「観光資源化を意識した交通機関の整備」の一環と認識しております。このような中で、武藤主任研究員は、2023 年から、「観光資源としての鉄道の存在意義」をテーマとする個別研究調査を開始し、昨年 1 月の研究報告会では、その中間報告をしました。本日は、その研究調査を更に深め、その締括りとなる成果を皆様と共有して、議論することによって、観光資源としての鉄道の存在意義について理解を深めていただき、また、この問題について今後更に貢献できれば、と考えております。

また、本日は、桃山学院大学経営学部経営学科の西藤真一教授に、コメンテーターとしてご参加いただいています。西藤先生には、昨年 1 月の研究報告会で武藤主任研究員が中間報告した際にもコメンテーターを務めていただきました。本日も、武藤主任研究員からの最終報告に対して、西藤先生から改めてコメントをいただきます。その後、当研究所の屋井所長をモデレーターとした登壇者同士のディスカッションにより議論を進めてまいります。また、ご参加いただいている皆様との質疑応答の時間も用意しておりますので、有効にご活用いただければ幸

いです。

　本日のコロキウムが、ご参加いただいた皆様にとりまして、新たな気づきや示唆を与え、また、皆様の今後の取組みにおいて何らかの手掛かりとなることができれば幸いと思っております。本日は御参加いただき、誠に有難うございます。

（以上）